

四季彩り

日本銀行京都支店が担当している京滋地域にゆかりのある「お金」というと、まず、宇治の平等院鳳凰堂が描かれた10円玉が思い出されます。また、1万円札の裏にも平等院の鳳凰が、2千円札の裏には「源氏物語絵巻」の絵図と紫式部が描かれています。

ほかに、護王神社（京都市上京区）に祀られた和気清麻呂が描かれていた旧10円札や、近江日野商人館に展示されている第2次世界大戦中の幻の陶貨など、いろいろな「お金」に出合うことができます。

前日銀京都支店長

鈴木 純一

このように、お札や貨幣の成り立ちをたどっていくと、価値の保存や決済手段といった経済的な役割とは別に、文化的な役割を感じます。4月



に、最新の偽造防止技術を用いた新紙幣と新500円貨のデザインが発表されると、沢栄一、津田梅子、北里葉三郎とゆかりのある地域では、さっそく3人を再評価する気

運が高まっているそうです。

さて、「お金」と並ぶ決済手段として、最近では、銀行振込、クレジットカード、電子マネーに加えて、スマートフォンを用いた決済が広まりつつあります。

こうした「キャッシュレス決済」には、お金の輸送・取り扱いにかかるさまざまなコストの削減、外国人観光客の利便性向上などのメリットがあります。また、取引履歴をマーケティングに活用することも想定されています。

ただし、キャッシュレス決済が普及するスピードは、どの程度、利用者にとって安全で使いやすい仕組みになるかにかかっています。取引履歴

などの個人情報取り扱いや、店舗側が負担する手数料をどの程度にするかといった課題も解決する必要があると見られます。さらに、平時だけでなく、災害発生時のことも想定しておかなければなりません。

お金の変遷は、時代の変化でもありません。この機会に、皆さんにも「お金」の役割について、あらためて関心を持っていただければと思います。

すぎき・じゅんいち 1965年生まれ。東京大工学系研究科修士。90年、日本銀行入行。主に金融経済調査や日銀統計作成に携わり、2018年5月から京都支店長。今月27日付で総務人事局（総務省出向）に異動。東京都出身。

「お金」の役割と将来像